

カンタンの鳴き声と飼い方

田村 一彦

私がこれまで住んでいた東京では、「カンタン」は鳴く虫の女王・幻の虫として珍重されているが、伊達市では、秋になるとヨモギの生えているところでは、どこでも鳴いている。そのため普段から身近にいるので、その鳴き声が「カンタン」であるという事を知らない人が多い。しかしあれが「鳴く虫の女王、カンタンの奏でる鳴き声」と教える事で、関心を寄せてくれる人が増えてきた。

そこで、身近に生息するその幽玄な鳴き声を、市民の皆さんにも親んでもらえるよう、「カンタン」の飼育と生態観察を通して、北海道における「カンタン」の飼育マニュアルの作成を行った。

「カンタン」は直翅類バッタ目コオロギ科カンタン亜科に分類される。体は薄黄緑色で、「ルールーラー」と幽玄な美しい鳴き声で鳴く虫として古くから親しまれてきた。

飼育箱は「カンタン」の体型が小柄なので市販のものではなく、虫の性質を考慮したものを作成した。餌は野生ではアリマキ(アブラムシ)を食べているが、飼育時はウグイスの餌に蜂蜜を混ぜて与えた。孵化時期には、孵化して真白い幼虫がヨモギの茎の産卵痕から出てくる瞬間を観察することができた。飼育環境下では孵化から成虫になるまで、約45日を要した。成虫になってから雄は3日程度鳴き出し、交尾をした。その後、雌は柔らかな芯を持ったヨモギ等の茎に産卵した。「カンタン」の越冬には産卵痕のあるヨモギの茎を虫籠に入れて屋外に置き、春まで孵化の時期を待つか、あるいは家の中に置き、時々茎に霧吹きで湿りを与える程度で十分である。

本研究により、「カンタン」の北海道における基礎的な飼育方法の確立がなされたことで、今後「カンタン」を飼育し、その幽玄な鳴き声を楽しみたいという方への活用が期待できる。



2007年4月11日 カンタンのオスの羽化

伊達市開拓記念館の「洛中洛外図屏風」について

林 良平

伊達市開拓記念館には「洛中洛外図屏風」が1点所蔵されている。全国に80本とも100本とも言われている「洛中洛外図屏風」が、北海道に唯一伊達市に存在するのは、明治3年に仙台藩一門巨理伊達家が移住した際に、多くの武家文化財とともに持ち込まれたからである。この屏風について、型式と年代、内容などを明らかにすることを試みた。

「洛中洛外図屏風」は第一定型(室町時代)と第二定型(江戸時代以降)に分類される。伊達市開拓記念館所蔵のものは、1626年の後水尾天皇の二条城へ行幸する場面がメインとなって描かれている。また、江戸幕府が成立し、その力が増大すると共に戦乱が終わって平和な時代がやってきた京都の町並みが描かれている。これらのことから、この屏風は第二定型のものであることが分かる。

一般的に屏風は右隻と左隻の対になっていて、右隻に下京(南)の内裏、公家、清水寺、祇園祭等が描かれ、左隻に上京(北)の二条城、有力武家等が描かれて、京都の町全体と春夏秋冬が一目瞭然であるのだが、残念ながら伊達市のものは、左隻しかない。それでも金閣寺や北野天満宮等の神社仏閣、28軒並ぶ商店、行商人や旅芸人、農民の姿など公家、武士から庶民まで生き生きと描かれている。

見れば見るほど興味は尽きないのだが、この屏風が誰により描かれたものか、そして、その由来や不明の右隻が何処にあるのかを明らかにすることは出来なかった。さらに研究の余地は残されている。



伊達市開拓記念館の産着・祝着について

上野 眞里子

伊達市開拓記念館には巨理伊達家が開拓移住を行った後、140年間保管されていた産着や祝着が所蔵されている。親が子供の成長や無事を願う想いは今も昔も同じである。しかし、医療に頼ることの出来なかった時代は、生まれてきた子供が無事に育つように呪術や信仰に頼ることが多かった。明治以降、幼児の死亡率の低下に伴い、着物における呪術的意味は失われていった。本論では武家である巨理伊達家に残された産着と祝着における呪術的意味と使用者について考察した。

この産着や祝着には「背守り」が付けられている。これは背縫いのない着物を着ると、そこから魔物が入ると信じられていたためである。昔は「7つまでは神の子」と扱われ、災いから小さな命を守る呪術的な信仰があり、7歳までの子供はすぐに神仏の世界に戻ってしまう存在と信じられていた(黒田日出男1994)。産着の背に付けられた糸印には、「子供が魔物に襲われた時、魔物がこの長い糸を見つけて糸だけを引いて帰り子供は助かる」という言い伝えがあることから、巨理伊達家に残された産着と祝着は、幼児の命を災いから守る厄除けの意図があることがわかった。

この背守りは金と銀の箔で描かれ、中心にある伊達家の家紋は、仙台市博物館所蔵の子供の着物と一致する。また白い色の着物は神事や儀礼に使用された幼児儀礼服であり、白綾小袖は許された者以外は着用してはならない決まりがあった。

以上の事などから、この産着と祝着は、もともと仙台本藩の嫡子などの為に作られたものが、後に一門である巨理伊達家が拝領した可能性が考えられる。



祝着の糸印と背紋(背守り)

Newsletter 【噴火湾文化】 第5号

●編集・発行 伊達市噴火湾文化研究所
〒052-0031 伊達市館山町 21 番地 5
TEL. 0142-21-5050 FAX. 0142-22-5445
E-mail bunka@city.date.hokkaido.jp
URL <http://www.funkawan.net/index.html>

●印刷 (有) 村上印刷
〒052-0026 伊達市錦町 95-1
TEL. 0142-23-2625 FAX. 0142-25-2459

2011年3月31日発行